ダイバーシティウィーク 2024

体験学習に関するアンケート結果（感想の概要）

開催日：令和６年１０月３０日（水）、３１日（木）午後１時～午後３時
会　場：日本大学商学部１号館前（噴水芝生周辺）
内　容：車いす体験、白杖体験、高齢者疑似体験
参加者：学生、教職員等延べ１３６名（アンケート回答者：３２名）

今回の体験で気がついたり感じたりしたことについて（アンケートから抜粋）

「車いす体験」

・車いすに乗ることで、普段気にしていない段差でも車いすの利用者にとっては乗り越えるだけでも大変だということを実感しました。何気ないことでも視点を変えることで多くの課題が見えました。

・ちょっとした段差や傾斜が、車いすを使う方にはストレスになることがわかりました。商学部はバリアフリー環境が整っていると思っていましたが、実際に車いすを使っている方からしたら、実はそうでもないのかもしれないと思いました。

・車いすに乗って、その目線の低さ・視野が体験できて良かったです。フラットだと思っているキャンパスも微妙に勾配があって、車いすの走行に影響が出るのが分かりました。

・ほんのわずかな傾斜や段差のある道が、車いすを利用する人にとっては、ハンドル操作がとても難しいことがわかりました。

・段差を越えるのにとても力が必要で腕が疲れてしまうし、まっすぐ進むだけでも難しかったです。

・ほんのわずかな傾斜や段差のある道が、車いすを利用する人にとっては、ハンドル操作がとても難しいことがわかりました。

・当たり前に行っていることが、そうではないことを身をもって体験する機会となった。車いす体験では、普段何気なく歩いていた段差が、とても難しく、緩い坂道でも恐怖を感じるなどを体感しました。

・段差を上がるのが思ったよりも力が必要だった。

・曲がる時に片方の車輪を動かしても思った通りに曲がるのが難しかった。少しでも地面が斜めになっていると同じ力で両方の車輪を押してもまっすぐ進めなくて大変だった。

・実際に相手の立場になってみることで、当たり前にできると思っていたことが、当たり前ではないのだと気が付きました。とても良い体験だったと感じました。

・実際に体験することで、普段目にする障がいを抱える方の大変さを少しばかり理解することができたと感じます。健常者には、言葉では理解が難しいと思うので実際に体験することは良いことだと思います。

・今回は１回のみの体験なので、車いすに乗るという非日常に触れることができ、新たな発見があり楽しみも感じた。しかし、障がいをお持ちの方からするとこれが日常であり、一般の方では感じない様々な支障を感じていることに思いを寄せた。

・車いすを押す際の声掛けの重要性が理解できました。ただ車いすを押すのではなく、声を掛けながら支援することで、相手の不安を低減できると感じました。車いすで自力で移動していた際、脚で上半身を支えていることに気づきました。下肢の筋力が低下している方の場合、ちょっとした段差の衝撃でも前のめりになって腕で上半身を支えなければならないことが判りました。

・本人になった場合、介助者になった場合のいずれも体験することが不可欠と感じました。

・車いすを使用されている方を街中で見かけた時の意識が変わりました。

「白杖体験」

・普段使っている階段がどのくらいあるか分からないと非常に段数が多く感じ、道もどこを歩いているか分からず、怖かった。

・目が見えない状態で前に進むことや、階段を下ることはとても不安になりました。周りが騒がしいと音が聞こえづらく、より一層前に進むことが恐くなりました。

・見えていれば気にならない段差や周囲の音などが、とても怖く感じたので、目の不自由な方が街に出る恐さを少しだけ理解できた気がしました。

・目が見えないことは非常に大変だと再認識した。

・キャンパス内でバリアフリーになっていないところがあることが、わりと見つかりました。

・普段は平らに見えている道でも、目が見えていないとデコボコしていて歩きづらくかんじました。

・白杖を使って歩くと、普段普通に歩いている地面がいかにでこぼこしているかに気づいて、周りを見ることが出来ないのに加えて更に不安を感じる要素になると思った。白杖を自分で動かしてみると長時間使うと想像以上に重さを感じてきて、腕が疲れてしまうことに気づいた。

・障害物や路面の状況など白杖から得られる情報の多さに気づきました。補助者の声掛けが周囲の状況の把握に役立つことを感じました。

「高齢者疑似体験」

・白内障のゴーグルでは影に隠れたものはほぼ見えず、気付けないと感じた。重りを付けて動いた時、自分の筋力でカバー出来たが、自分の体重を支える筋力や認知能力も落ちることを考えると、1つの動作も難しいと思った。

・視力や聴力を奪われると活動に制限がかかると実感した。

・とにかく身体が重く、一つ段差を上がるだけでも大変でした。耳が聴こえづらいことにもとてもストレスを感じました。

・高齢者が歩いたりしづらいのは、体の重さや関節の動かしづらさのせいであると分かった。また、耳の聞こえづらさや視界の悪さのせいで肉体的にも精神的にもストレスがかかっているなと思った。

・白内障を体験できる眼鏡をかけた瞬間が一番の驚きでした。これを「予防」していく取り組みが今後の高齢社会にとってかなり重要だと感じました。

・専用のメガネで視野が狭くなっているのが1番つらかった。例えば階段を歩く時に物との距離感がつかめないので階段の柵に何度もぶつかった。スーパーでレジに並んでいる時に、ぶつかるぐらい列を詰めてくる高齢者の方がたまにいるが、視野が狭くなってくるからなの

かもしれないと気づいた。

・体の制限以上に視覚聴覚の制限が大変であった。

・自分の祖母も立ち上がるのに一苦労しながら生活する姿を見ていたが、実際に自分も体験すると、上り階段で足が曲がらないことや、指先の不自由さなどを身をもって体験することができました。

・高齢者は非常に不自由なことだらけであること。

・ゆっくりとしか動けない大変さが理解できました。

・健常者に見えても高齢者には他から見えない苦労があると思うので周囲が思う以上に本人が大変である。